日本語の受動えに関する一考察
－ 韓國語の受動文との対照を中心に －

金　勝　漢

目　　次

Ⅰ. 序　論
Ⅱ. 本　論
1. 韓・日兩國語の受動形の分類
2. 日本語の受動文の分類
3. 日本語の受動文の特徴
4. 日本語の受動文と韓國語の表現
5. 日本語の使役受動文
Ⅲ. 結　論

Ⅰ. 序　論

韓國語と日本語は、言語構造とりわけ文法構造において多くの共通點を有している。

しかし、下位分類においては相違點も多い。

われわれは、その相異點をおろそかに取り扱いがちである。これらの相違點が日本語學習上の問題になるわけであるが、特に、日本語の受動文[1]は間違いが起りやすい。

例えば、

(1) a、三木さんは、首相に選ばれました。（鄭在仁－86）[2]
　b、三木氏는 수상에 선출되었읍니다.
(2) a、いそがしい時、かれに來られると、まったく困る。（鄭在仁－86）
　b、바쁠 때 그가 오면 대단히 곤란하다.
(3) a、夏、一番多く飲まれる飲物は、ビールです。（閔聖泓－378）[3]
　b、여름에 제일 많이 마시는 음료는 맥주입니다.

1）一般的に韓國語では「被動」、日本語では「受身」という用語を用いているが、本稿では「受動」という用語で統一した。
2）鄭在仁、「初級大學日本語」、韓一出版社、1975、p.86.
3）閔聖泓、「新選日本語教本」、민중서관、1974、p.378.

(1a)～(3a)の日本語を韓國語に表現したのが(1b)～(3b)である。日本語の受動文に對應する韓國語の表現部分を取り出して考察してみると、(1a)の「選ばれました」の日本語の受動文が、やはり(1b)でも「선출되었읍니다」のように、韓國語の受動文に表現されている。

しかし、(2a)(3a)の「來られる」「飲まれる」のような日本語の受動文は、韓國語にはないのである。

それで、韓國語は、(2b)(3b)での「오면」・「마시는」のように能動文にならざるをえないのである。もし、むりやりに直語譯して、「와지면」・「마셔지는」のように受動文に表現しようとすれば、おかしな表現になってしまう。

このように韓・日兩國語(以下兩國語と言うことにする)の受動文の表現にはかなりの違いがある。

それで、日本語の受動文は、いかなる特徵をもっているかということを中心に調べるのを本稿の目的とするのである。

益岡隆志によれば、受動文の十全な分析をおこなうためには、少なくとも、①關與する名詞・動詞の形態的特徵はどのようなものであろうか、というような形態論的問題、②受動文の統語構造はいかなるものか、また、對應する能動文との統語的關係をどのように記述すべきかなどの統語的問題、③受動文はどのような意味を表わすのか、また、受動化の機能はいかなるものであるのか、というような意味論的な問題を取り扱う必要がある。

と述べている。[4)]

本論文では、これらの諸問題のうち、形態論的・統語論的な問題にもふれながら、意味論的な問題に重點を置いて述べて行きたいのである。

その論述の順序としては、

①、兩國語の受動の形態論的な特徵について、

②、日本語の受動文の分類について、

③、日本語の受動文の統語的・意味的特徵を韓國語の受動文と對照しながら考察したあと、

④、日本語の受動文の用例を韓國語に表現した場合には、いかなる表現を取るかについて考察し、

⑤、終わりには、日本語に表われる使役受動文について觸れて見たいのである。

Ⅱ. 本　　論

1. 兩國語の受動形の分類

先ず、韓國語の受動形の特徵を調べて見ることにする。

A. 韓國語の受動形

韓國語の受動形には、次のような三つの形がある。

4) 益岡隆志、"日本語受動文の意味分析"、「言語研究」第82號、日本言語學會、1982、p.48.

1）受動補助語幹の添加によるもの、

これは韓國語の受動形の典型的なもので、能動詞の語幹に'이・히・리・기'などの受動補助語幹を添加して受動形をなしている。

o이；덮다(おおう) — 덮이다(おおわれる)

o히；찍다(撮る) — 찍히다(撮られる)

o리；물다(かむ) — 물리다(かまれる)

o기；쫓다(追う) — 쫓기다(追われる)

2）'하다'動詞の受動形

'하다'動詞の語幹'하'の代わりに、'ー되・받・당・듣'などを入れ替えて、'되다・받다・당하다・듣다'などの形態で受動を表わす。

o감금(監禁)하다(監禁する) — 감금되다(監禁される)

o파괴(破壞)하다(破壞する) — 파괴당하다(破壞される)

o꾸중하다(叱る) — 꾸중듣다(叱られる)

o칭찬하다(ほめる) — 칭찬받다(ほめられる)

3）受動助動詞'지(다)'によるもの

動詞の語幹に'ー아／ー어지다'をつないで受動形を成している。

o막다(塞ぐ) — 막아지다(塞がれる)

o만들다(作る)— 만들어지다(作られる)

B．日本語の受動形

日本語の受動形は動詞の未然形に助動詞「(ら)れる」がつながって受動形を成している[5)]

1）語幹が子音で終る動詞(いわゆる五段活用動詞)

語幹＋ー are ー (ru)

o死ぬ (sin-u) — 死なれる (sin-are-ru)

2）語幹が母音 (i・e) で終る動詞(いわゆる上一段・下一段活用動詞)

語幹＋ rare ー (ru)

o起きる (oki-ru) — 起きられる (oki-rare-ru)

o育てる (sodate-ru) — 育てられる (sodate-rare-ru)

3）不規則動詞(いわゆるサ行變格・カ行變格活用動詞)

oする (suru) —される (sare-ru)

oくる (kuru) —こられる (korare-ru)

5）寺村秀夫、「日本語のシンタクスと意味1」、くろしお出版、1982、p.213.

2. 日本語の受動文の分類

日本語の受動文を韓國語と對照するためには、その基準になる日本語の受動文の分類を明らかにしなければらない。日本語の受動文の分類は、多くの學者から支持されている一般的な分類基準があるのではなく、學者によってそれぞれの見解を異にしているし、その分類の觀點は大きく四つに分けられている。

1) 統語的な觀點による分類

統語的な觀點から日本語の受動文を分類した學者には森田良行と井上和子がある。

先ず森田氏(1981)は、日本語の受動文を形式面から、次の10種類に分類している。[6]

第1種の受身

①Aが　　自V → (Bは)Aに自Vれる

②Aが　Cを他V → (Bは)AにCを他Vれる

③AがBのCを他V → BはAにCを他Vれる

④AがBにCを他V → BはAに(から)Cを他Vれる

⑤AがBに　自V → BはAに(から/によって)自Vれる

第2種の受身

⑥AがCを他V → CはAに他Vれる

⑦AがCを他Vている → CはAに他Vれている

⑧AがCをBに他V → CはAにBに(から)他Vれる

⑨(Aが)Cを他V → Cが他Vれる

⑩(Aが)CをBに他V → CがBに他Vれる

井上氏(1979)は日本語の受動文を大きく二つに分けている。[7]

受動文の中で、對應する能動文の目的語を主語とするものを「單純受動文」と呼び、能動文の目的語として受動文の主語と對應する名詞句のないものを「間接受動文」と呼んでいる。

井上氏は、次のような例を上げて間接受動文を說明している。

(4)、われわれは、雨に降られた。

(5)、太郎は次郎に成功された。

(6)、日本が西獨にマルクを引き上げられた。

上の例文から見れば井上氏の單純受動文は、森田氏の第2種の受身と同じものであり、間接受動

6) 森田良行、"受身・使役の言い方"、「講座日本語教育」第9分册、早稻田大學語學教育研究所、1981、p.20.

7) 井上和子、「變形文法と日本語・上卷」、大修館書店、1979、pp.74～75.

文は、自動詞の受動文と能動文の他動詞の目的語が受動文の主語とならないものであるから、森田氏の第一種の受身と同じものである。

2）統語と意味の觀點による分類

久野暲（1983）は、次のような例を上げて日本語の受動文を分類している。[8)]

(7)、この子は皆にかわいがられている。

(8)、田中は、山田先生に認められた。

(9)、山田は、花子に、アパートに來られた。

(10)、田中老人は、娘に、その青年と結婚された。

(7)(8)の受動文と(9)(10)の受動文の間には、被害迷惑の意味が含まれているかいなかという 意味的な違いの他に、次の構文的な違いがあると述べている。即ち、(7)(8)には、それ全体に對應する能動文があるが、(9)(10)にはそれがなく、その代わりに、主語を取り除いた部分に對應する能動文があるということである。

それで、

(7)(8)は、意味上、中立受動文、構文法上、直接受身文であり、

(9)(10)は、意味上、被害受身文、構文法上、間接受身文である。

と、日本語の受動文を統語と意味によってそれぞれ二つの種類に分類している。これを森田氏の分類と對照してみれば、久野氏の統語上の直接受動文と間接受動文は、それぞれ森田氏の⑥～⑩と①～⑤と對應し、また、意味上の中立受動文と被害受動文は、それぞれ、森田氏の⑦～⑩と①～⑥と對應すると思われる。

3）意味的な觀點による分類

日本語の受動文について意味を中心として分類した學者には、寺村秀夫氏（1983）と柴谷方良氏（1982）の見解がある。

寺村氏の見解はだいたい次の通りである。[9)]

(11)、直孝は祖母に育てられた。

(12)、直孝は五歳のとき父母に死なれた。

(13)a、アーサー王子が兩親をラビック王に殺された。

b、アーサー王子が豫言者マーリンに助けられた。

(11)、(13b)は、受動文の主語が述語動詞の動作によって直接影響を受けるという意味的特徴、および、受動文に對應する能動表現をもつという構文的特徴をもつ、と寺村氏は言い、

さらに、(12)(13a)は主格補語の受ける影響が間接的であり、對應する能動表現をもたない、と述

8）久野 暲、「新日本文法研究」、大修館書店、1983，pp.192～193.

9）寺村秀夫，前掲書，pp.214～215.

べている。

(11) (13b) のようなタイプの受動文を「直接受身」、(12) (13a) のような受動文を「間接受身」と區別して、間接受動文は一般に「迷惑受身」とも呼ばれる、と言っている。 これは久野氏の見解とほぼ同じであるが、久野氏は受動文の統語的分類には直接受動文と間接受動文という用語を用い、意味的な分類には中立受動文と被害受動文という用語を用いているものに對して、寺村氏は「直接・間接受動文」という用語を意味的な觀點に重點をおいたものに用いたのが異なる點である。

また、久野氏の被害受動文と寺村氏の間接受動文を森田氏の分類形式にあてはめてみると、少しの違いが見られる。 即ち、森田氏の⑥は、久野氏の被害受動文には屬するが、寺村氏の 間接受動文には屬するものではなく、直接受動文に屬するものではないかと考えられる。

一方、柴谷氏も日本語の受動文を意味的な觀點から二つのタイプに分けている。[10]

受動文の主語が「或るものの動作によっての利害を被る意を表わす」かどうかを基準として、「利害の受身(被動)」と「單純の受身(被動)」に分けている。 これは、久野氏の「中立受身」と「被害受身」に分けたものと同じである。

また、もう一つは、受動文の主語の影響のされ方を基準として、「直接受動文」と「間接受動文」に分けている。

4) 統語と意味の折衷的な觀點による分類

鈴木重幸(1972)氏と國立國語研究所編「現代語の助詞・助動詞」の分類が代表的な見解である。

鈴木氏は、[11]

①直接對象のうけみ、②あいてのうけみ、③もちぬしのうけみ、④第三者のうけみ、のように四つに分類している。

①②③は統語的な面に、④は意味的な面に重點を置いたものであろう。

次に國立國語研究所編には、[12]

①動作・作用の直接的受身、②動作・作用の間接的受身、③動作・作用の利害關係(迷惑の場合が多い) に關する受身

のように三つに分類している。

これも、①②は統語的な觀點から、③は意味的な觀點から分類したものであろう。

今まで、大きく四つの觀點に分けて、日本語の受動文の分類について、七人の學者の見解を見て來た。 これらの間には類似點もあるが、相違點もある。 また、同じ用語が反對の立場で用いられるものもあった。 いろいろの見解を森田氏の分類を基準にして一つの表にまとめて見ると、表一(1)のようである。

10) 柴谷方良, 「日本語の分析」, 大修館書店, 1982, pp.133 ~ 135.
11) 鈴木重幸, 「日本語文法・形態論」, 麥書房, 1972. pp.279 ~ 281.
12) 日本國立國語研究所, 「現代語の助詞・助動詞 : 用法と實例」, 1980, pp.280 ~ 281.

〈表－1〉

觀點		統語	統語意味		意味			統語・意味の折衷	
學者名		井上	久野		寺村	柴谷		鈴木	國立國語研究所
森田の分類			㋑	㋺		㋑	㋺		
第1種の受身	①	間接受動文	間接受身文	被害受身文	間接受身	利害受身（被動）	間接受動文	第三者のうけみ	利害關係の受身
	②							もちぬしのうけみ	間接的受身
	③							あいてのうけみ	
	④								
	⑤							第三者のうけみ	利害關係の受身
第2種の受身	⑥	單純受動文	直接受身文	中立受身文	直接受身	單純受身（被動）	直接受動文	直接對象の受身	直接的受身
	⑦								
	⑧								
	⑨								
	⑩								

a、寺村氏は、統語と意味の兩觀點に基いて分類したものであるが、意味的なものに重點を置いて説明したので、意味の部分で説明することにした。

b、久野の㋑は統語的、㋺は意味的な觀點から見た用語である。

c、柴谷氏の㋑は主語が利害を被(こうむ)る意を表わすかどうかを、㋺は主語の影響のされ方を基準として用いた用語である。

上の表—(1)で表われたように、森田氏の第1種の受身は「間接・利害・被害」と言う用語を、第2種の受身は「直接・單純・中立」と言う用語を用いたが、「間接」と言う用語が統語的な分類にも、意味的な分類にも用いられているので混同しやすいものであると考えられる。

3．日本語の受動文の特徴

A、間接受動文[13)]

①と⑤は自動詞の受動文であり、その他、②～④は他動詞の受動文である。この形式の特色といえば、能動文の主格であった「が」が「に」格になり、受動者を常に主語として立て、他動詞の目的語は、受動文においてもそのまま「を」格として残るという三つの點である。

① Aに自Vれる形式

13）本稿では、統語的に「直接受動文」と「間接受動文」，意味的に「中立受動文」と「被害受動文」という用語を用いることにした。

(14) 雪に降られて歸りの車を拾えなかった。(閔聖泓－379)

(15) 治療している間に死なれたら、自分たちの名譽が失墜してしまうからです。(中3－156)[14]

(16) からの鳥かごがころがって、三男が放心したように空の方を見ている。そうじをしていて逃げられたのだ。(中1－39)

(17) それからまた、馬は人から話しかけられるが、たいへん好きでもあるそうだ。(中2－74)

① の形式は自動詞の受動文であり、有情物が行爲者である例が多く、たとえ非情物であっても、それを人格的に扱う。(14)の「雪」は有情物ではないが、自主的に起こる自然現象であるから、① の形式の受動文が使えると考えられる。

「雪が降る」、「(病人)が死ぬ」、「鳥が逃げる」ということによって、受動文の主語が自分の意志とは關係なく被害を被ることになり、「人が話しかける」ということによって、主語である「馬」が迷惑を感じるということになる。このように日本語の自動詞の受動文は意味的には「被害の受動文」である。

一方、自動詞の受動文が韓國語にはないというのが一般的な見解であるが、自動詞の受動文を認めている學者も[15]ある。

朴良圭氏(1978)は次のような例文を上げて、韓國語の自動詞の受動文を說明している。

(18) a、{새가, 먼지가}하늘을 난다.

b、{*새가, 먼지가}하늘에 날린다.

「먼지(ほこり)」はおのずから「空を飛ぶ」という能力のない無生物であるから、「바람에 날리다(風に飛ばされる)」ということは、他のものから動作を受けて受動化になることを意味する。

即ち、自動詞の能動形の「날다」に對する、受動形の「날리다」が成立することになる。

しかし、兩國語の自動詞の受動文の意味の面から見れば、日本語の場合は被害の受動文であるが、韓國語には「被害・迷惑」のような意味が感じられないことである。

② AにCを他Vれる形式

(19) a、このかわいい娘さんは、メロスの裸体を、皆に見られるのが、たまらなくくやしいのだ。(中2－276)

b、皆がメロスの裸体を見る。

(20) a、わたしたちは、となりのむすこに一晩中レコードをかけられた。(鈴木－281)[16]

b、となりのむすこが一晩中レコードをかけた。

14) 志賀直哉外,「(日本)中學校國語三」, 學校圖書株式會社, 1971, p.156.
以下, (中1－), (中2－)も同じ意味である。

15) 朴良圭, "使動과 被動",「국어학」7호, 국어학회, 1978, p.63.
김영일, "국어 피동구문의 연구",「논문집」제16집제1호, 부산교육대학, 1980. p.52.

16) 鈴木重幸, 前揭書, p.281.

(21) a、日本が西獨にマルクを引き上げられた。(井上・上－80)[17]

b、西獨がマルクを引き上げた。

② の形式は他動詞の受動文であるが、その目的語「を」格は、受動文でもそのまま目的語として殘る。それに、主語を立てるとすれば、人間または有情物がくるのである。(21a)の主語である「日本」も日本人という意識が底に潜んでいるから人格的に使われたものであろう。

この形式の意味的な特徴といえば、① とともに、動作主の行爲・作用は被動作主とは無關係に行なわれていることである。

相手側の行爲・作用のため、被動作主が迷惑や被害を被る。

(19b)の「メロスの裸体を見る」、(20b)の「レコードをかける」、(21b)の「マルクを引き上げる」と言う行爲・作用によって、(19a)～(21a)の能動文には登場しない第三者である「娘」、「わたしたち」・「日本」が間接的にめいわくをうけるものであるから「第三者の受身」[18] とも呼ばれる。

この形式は ① とともに、迷惑意識が强く、心理的受動文として、情意的な陰影の濃い、はなはだ日本的な受動文である。[19]

③ BはAにCを他Vれる。

(22)a、これも地方から出て來たある若い學生の話ですが、友だちにその方言を笑われて、すっかり人ぎらいになり… (中1－26)

b、友だちが若い學生のその方言を笑う

(23)a、馬はぬかるみに足を取られるし、わたしは一寸先も見えないのであった。(中3－184)

b、ぬかるみが馬の足を取る。

(24) a、ケイコは、…、おばあさんに手を引かれて、人が七日で回れる小豆島を十日の上もかかったという、(中1－278)

b、おばあさんがケイコの手を引く。

③ の形式は、能動文の目的語である「を」格がそのまま殘ることは、前の ② の形式と同じであるが、動作・作用の對象のもちぬしが受動文の主語になることが、他の形式と違う特徴であろう。

もちぬしが主語として表われるので、「もちぬしの受身」[20] とも呼ばれる。

(22a)の「友だちにその方言を笑われる」、(23a)の「ぬかるみに足を取られる」などは、被動作主からみれば迷惑の受動である。(24a)の「おばあさんに手を引かれる」のように恩惠の受動になる例もある。

また、有情物が受動者となるのが一般的であるが、(23)のように非情物である「ぬかるみ」が

17) 井上和子, 前掲書, p.80.
18) 鈴木重幸, 前掲書, p.281.
19) 森田良行, 前掲論文, p.22.
20) 鈴木重幸, 前掲書, p.280.

受動者となる例もある。これはある事物や物の擬人法であると考えられる。

一方、韓國語にも次のような例が見られる。[21]

(25)a、그는 형에게 재산을 빼앗기었다.

b、*그는 재산을 형에게 빼앗았다.

c、형이 그의 재산을 빼앗았다.

(26)a、영수는 가시에 손을 찔리었다.

b、*영수는 손을 가시에 찔렀다.

c、?가시가 영수의 손을 찔렀다.

(25 C)(26 C)から見れば、韓國語にも日本語の ③ の形式のような受動文が成立し、このような受動文を김영일氏(1980)は「間接被動文」と呼んでいる。意味的にも「被害受動文」[22] になると考えられる。

④ BはAに(から)Cを他Vれる形式

(27)a、私は母に仕事を頼まれた。(森田一 24)

b、母が私に仕事を頼んだ。

(28)a、すぐそばには、…、やくざ馬が車台だけの荷馬車をつけられて立っている。(中3一191)

b、(馬の主人が)やくざ馬に車台だけの荷馬車をつけた。

(29)a、花子は太郎に算數をおしえられた。(鈴木一 280)

b、太郎は花子に算數をおしえた。

この形式は能動文の主語を「に」格に立てるのが、③ の形式と違う所であり、能動文の「を」格がそのまま残ることは、② ③ と同じ點である。

また、③ とともに有情物の受動文である。(27a)の「仕事を頼まれた」、(28a)の「荷馬車をつけられる」は被害・迷惑の受動であり、(29a)の「算數をおしえられる」は恩惠の受動であるという點で、意味的にも ③ の形式とほぼ同じである。

⑤ BはAに自Vれる。

(30)、經濟は政治に影響される。(森田一 25)

(31)、惡とは何か、とひらきなおされたら、返答ができない。(森田一 25)

---

21) 김영일, 前掲論文, p.51.
(25 C)(26 C)は筆者が兩國語の對照のために, 日本語の受動文の ③ 形式に準じて變形させたものである。

22) 韓國語の受動文も意味的に, 「中立被動」と「被害被動」に分けている。
양동휘, "국어의 피·사동", 「한글」제 166 호, 한글학회, 1979. p.46. 參照

① と同じ自動詞の受動文である。① ～④ は有情物が主語になるが、⑤ の形式は(30)のように非情物の主語も見られるものである。

⑤ も① のように迷惑の氣持ちが多い、被害受動文である。

B、直接受動文

これらは他動詞の受動文である。動作をしかけるものと、動作を受けるものとがあり、能動文の目的語を主語とする直接受動文である。

⑥ CはAに他Vれる形式

(32)a、まず、政府の原案がマスーコミによって報道される。(中3－205)

b、マスーコミが政府の原案を報道する。

(33)a、いったい、ぼくは、なぜこうみんなにいやがられるのだろう。(中1－60)

b、いったい、みんなが、なぜこうぼくをいやがるのだろう。

(34)a、このようなことわざは、いつ、どこで、だれによって作られたものか、明らかではありません。(中1－234)

b、だれが、いつ、どこで、このようなことわざを作ったものか、明らかではありません。

⑥ の形式は非情物の受動が多く、「に」格が「～によって」の意を表わし、省略すると文意が不明瞭になってしまうため、必ず「に」格が文面に現われる點が特徴的である。[23]

また「C」は「A」によって直接'…される'犧牲者的意識が根底にある被害の受動文である。

(35)a、쥐가 고양이에게 잡히었다.(김영일－50)[24]

b、고양이가 쥐를 잡았다.

(35)の例文からみれば、韓國語にも日本語の「CはAに他Vれる」形式と同じ「C(이)가 A에게 V(他動詞)の受動形」が表われている。

⑦ CはAに他Vれている形式

(36)a、わたしたちは、完全に象の群れに包圍されていた。(中3－147)

b、象の群れが、完全にわたしたちを包圍していた。

(37)、びんのレッテルに書かれている文字は不思議と覺えていて、…(中3－148)

(38)、日本語には敬語が發達していることも、よく知られています。(中3－265)

⑦ は(36)のように能動文の目的語が受動文の主語として表われる形式であり、文型的には⑥ と同じであるが、純粹に文法的な理由から受動文となる形式である。

23) 森田良行, 前掲論文, p.26.
24) 김영일, 前掲論文, p.50.

また、(36)(37)のような「他動詞＋受動＋ている」は、婉曲的な斷定として客觀性・普遍性を帶びているので、普遍性・一般性を要求する公的文章(新聞記事・論說文など)では、ことさらこの形式が用いられる。[25]

(39)a、서울은 산에 둘러싸여 있다.(안소정－14)[26]
　b、산이 서울을 둘러싸고 있다.

(39)は「～(이)가～에게 V(他動詞)の受動」の形式で、日本語の ⑦の形式と全く同じである。

⑧ CはAに(から)Bに他Vれる形式

(40)a、私は皆から代表に選ばれた。(森田－27)
　b、皆が私を代表に選んだ。
(41)、O氏は周圍の人たちから自然隨順の聖者といわれるほど靜かな人柄だが。(森田－28)
(42)、宗教に關心を示さぬ輩は(人々から／に)人間の片隅にもおけぬ馬鹿者にされてしまう。(森田－28)

(40)のように⑧ も對應する能動文を取る形式である。⑥ の形式が直接的行爲であったのに對して、この形式は間接的動作を表わす動詞が述語に立ち、「に」格のみならず「から」格も可能である。

しかし、⑧ の形式は能動者が人の場合、(41)では「から」格が文面に表われているが、(42)のように「に(から)」格を省略することができる。[27]

(40′)a、나는 모두에게 대표로 뽑혔다.
　b、모두가 나를 대표로 뽑았다.

(40′)は、日本語の韓國語譯であるが、「～(이)가～에게 V(他動詞)の受動」の形式で、日本語の⑧形式と同じである。

⑨ Cが他Vれる形式

(43)、前に上げた俳句の「ばった」ということばからは、さわやかな秋の野原が想像されます。(中2－16)
(44)、すいぶんたくさんの動物が使われているわけです。(中1－139)

この形式は、能動文である「さわやかな秋の野原を想像する」、「たくさんの動物を使う」の「を」格に立つ目的語を受動者と見た表現で、「が」格の受動形式を構成するところに特徵がある。

25) 森田良行, 前掲論文, p.27.
26) 安昭貞, "日本語の受身表現に關する一考察", 석사학위논문, 한국외국어대학교 대학원, 1982. p.14.
27) 森田良行, 前掲論文, p.28.

(44′)a、꽤 많은 동물이 사용되고 있는 셈입니다.
b、꽤 많은 동물을 사용합니다.

(44′) も(41)の韓國語譯であり、「～ (이)가V(他動詞)の受動」の形式で、兩國語ともに ⑨ のような同じ文型形式が成り立つ。

⑩ CがBに他Vれる形式

(45)a、能力が我々に與えられる。(森田－28)
b、(神が)能力を我々に與える。

(46)、映畫が初めてわが國に傳えられたのは、明治三十年のことであるが、(中3－203)

⑩ は(45)のように對應する能動文をもつのが他の直接受動文と同じであるが、「に」格が「…によって」ではなく、「…に對して」の意味である點が他の形式と異なる。[28] ⑨ とは同じ形式であるが、「に」格を取るのが異なる。

(45′)a、능력이 우리에게 부여된다.
b、(신이) 능력을 우리에게 부여한다.

(45′)は、(45)の韓國語譯であるが、「～ (이)가～(을)를～에게V(他動詞)の受動形」の形式で、日本語の ⑩ 形式と同じである。

4. 日本語受動文と韓國語の表現

Ⅱ•3で上げた用例の文章を韓國語に表現したとき、その韓國語はどんな表現をとるであろうか。そこに日本語との對應關係がみいだされるであろうか、あるとすれば、前に上げた、統語上の「直接受動文」•「間接受動文」と意味上の「中立受動文」•「被害受動文」とはどんな對應關係がみいだされるであろうか、などについて調べてみたい。

例文はすでに上げたので、必要な部分だけもう一度引用して對照してみることにする。

〈表－2〉

形式番號	日本語の受動文	韓國語との對應關係		
		韓國語譯	受動	能動
①	(14)雪に降られて、	o 눈이 내려서		○
	(15)治療している間に死なれて	o 치료하고 있는 사이에 죽으면,		○
	(16)そうじをしていて逃げられたのだ。	o 청소를 하고 있는 사이에 도망친 것이다.		○
	(17)人から話しかけられる。	o 사람들이 말을 걸다.		○

28) 森田良行, 前掲論文, p.29.

②	(19) メロスの裸体を、皆に見られるのが、 (20) 一晩中レコードをかけられた。 (21) マルクを引き上げられた。	o 모든 사람들이 메로스의 나체를 보는 것이 o 밤새도록 레코드를 틀었다. o 마르크화(환율)을 인상했다.		○ ○ ○
③	(22) 友だちにその方言を笑われて。 (23) ぬかるみに足を取られる。 (24) おばあさんに手を引かれて。	o 친구들이 그 사투리를 비웃어서 o 진창에 발이 빠지다 o 할머니 손을 잡고		○ ○ ○
④	(27) 仕事を頼まれた。 (28) 荷馬車をつけられて立っている。 (29) 算數をおしえられた。	o 일을 부탁받았다. o 달구지를 달고(걸치고)서있다. o 算數를 배웠다.		○ ○ ○
⑤	(30) 政治に影響される。 (31) 惡とは何か、とひらきなおされたら。	o 정치에 영향(을) 받는다. o 악이란 무엇인가, 라고 갑자기 정색을 하고 물으면		(○) ○
⑥	(32) マスーコミによって報道される。 (33) みんなにいやがられる (34) だれによって作られたものか。	o 매스컴에 의해서 보도된다. o 모두에게 미움받는다. o 누구에 의해서 만들어진 것일까?	○ ○ ○	
⑦	(36) 象の群れに包圍されていた。 (37) びんのレッテルに書かれている。 (38) よく知られています。	o 코끼리떼에 포위되어 있었다. o 병의 상표에 씌어있는 o 잘 알려져 있읍니다.	○ ○ ○	
⑧	(40) 代表に選ばれた。 (41) 聖者といわれるほど (42) 馬鹿者にされてしまう。	o 대표로 뽑혔다. o 성자라고 불리워질 정도로 o 바보 취급을 당해 버린다.	○ ○ ○	
⑨	(43) 秋の野原が想像されます (44) 動物が使われている。	o 가을들판이 상상됩니다. o 동물이 사용되고 있다.	○ ○	
⑩	(45) 能力が我々に與えられる。 (46) 初めてわが國に傳えられたのは。	o 능력이 우리에게 부여 된다. o 처음 우리나라에 전해진 것은	○ ○	

日本語の受動文を韓國語に表現した場合、日本語の受動文と對應關係にある韓國語譯の表現の基準は、日本語の受動文の統語的な分類と密接な關係があると考えられる。

間接受動文である①～⑤の形式について調べて見ると、①，⑤のような自動詞の受動文と②～④のように能動文の「を」格がそのまま殘る他動詞((26)の例文を除いた場合)の韓國語譯は、みんな能動文の表現を取っている。

しかし、表一(2)でもはっきり表われたように、日本語の直接受動文である⑥～⑩の形式は、すべてのものが韓國語譯も受動文の表現を取っていることがわかる。

即ち、日本語の受動文を韓國語に表現した場合、統語上の間接受動文と意味上の被害受動文は、韓國語の能動文の表現と對應關係にあり、統語上の直接受動文と意味上の中立受動文は、韓國語の受動文の表現と對應關係にあると考えられる。

5．使役受動文

日本語の使役態は動詞に助動詞「(さ)せる」を付けて表わす。この使役の助動詞「(さ)せる」に受動の助動詞「(ら)れる」が付いて、「(さ)せられる」の形態を取るのが「使役受動」である。

韓國語にも「使役＋受動」[29]のような形態が文法的には可能であっても、實際の言語生活には表われない表現であろう。

この使役受動文は統語上においても、能動文の受動化と同じ形式を取っている。

例文を上げて説明すれば、

(47)a、太郎がさち子をなぐった。(能動文)

b、さち子が太郎になぐられた。(受動文)

(48) a、ジョンが弟を就職させた。(使役文)

b、弟がジョンに就職させられた。(受動文；使役受動文)(井上・上巻－89)

のように(47a)(48a)の「を」格が、それぞれ、(47b)(48b)の主語になっている。

しかし、二重目的語、即ち、直接目的語と間接目的語が名詞句で表われる場合には、能動文の受動化とは異なる點が見られる。間接目的語が有生名詞句(有情物)で、直接目的語が無生名詞句(非情物)であれば、前者が受動文の主語になる。

これに對して、二つの目的語が有生名詞句であれば、二つの受動文が問題なく許容されるのである。[30]

例文をあげれば、次のようである。

(49)a、花子が赤ん坊を私にあずけた。(能動文)(井上・上－81)

b、私が花子に(から)赤ん坊をあずけられた。(受動文)

c、赤ん坊が花子から私にあずけられた。(受動文)

(50)a、ビルがジョンに子供を託兒所へあずけさせた。(使役文)(井上・上－89)

b、ジョンがビルに子供を託兒所へあずけさせられた。(受動文；使役受動文)。

c、＊子供がビルに(によって)ジョンに託兒所へあずけさせられた。(受動文；使役受動文)

(49)では、二つの目的語がみんな受動文の主語になっている。しかし、(50a)の使役文では間接目的語は(50b)のように使役受動文が許容されるが、直接目的語である「を」格は(50c)のよう

29) 韓國語でも「使動(使役)＋被動(受動)」の形態が文法的には現われると説明している。
金敏洙，「國語文法論」，一湖閣，1978．p.274．參照

30) 井上和子，前掲書，p.81．

に使役受動文が許容されないのである。

使役受動文の意味的な面について考察してみようと思う。

(51)a、自分だけがうんと重荷を負わせられているような氣がして、たまらなく憂うつになる。
(中2－284)

b、자기만이 큰 부담을 지고 있는 듯한 생각이나서, 견딜 수 없이 우울해진다.

(52)a、ぼくはいつのまにかそこから、自分というものについて考えさせられたりする。
(中3－223)

b、나는 어느 사이엔가 그곳으로부터 자기자신에 대하여 생각하기도 했읍니다.

(53)a、その最後の四行から、わたしたちは、作者の心の動きを身近に感じさせられる。
(中3－16)

b、이 제일 마지막 四行에서, 우리들은, 작가의 마음(의 움직임)을 친밀하게 느낀다.

日本語には、(51a)～(53a)の例文に見られるように自分の意志とは關係ないことによって、動詞の動作の主体である話し手の自身が迷惑や被害などを被るという話し手の中心の被害受動文であるように考えられる。

ところが、韓國語には、使役受動文が成立しないので、(51b)～(53b)のように能動文に表現せざるをえないのである。

Ⅲ. 結　　論

今まで兩國語の受動文について考察してきたことをまとめてみると、

(1) 日本語の受動の文法的形式は動詞に助動詞'(ら)れる'を付けて表わしているのに對して、韓國語の場合は、①'이・히・리・기'などの受動補助語幹の添加、②'하다'動詞の語幹'하'の代わりに'－되'などを入れ替える形態、③受動助動詞'지(다)'によるもの、などの三つの形式がある。

(2) 日本語の受動文は、①統語、②統語と意味、③意味、④統語・意味の折衷、などの四つの觀點によって、それぞれ、その下位分類を成している。

(3) 日本語の直接受動文に當たる形式は、韓國語の場合にも同じ形式がみいだされた。

しかし、日本語の間接受動文の中でも、'(Bは)Aに～自Vれる'、'(Bは)Aに～Cを他Vれる'などに當たる形式の表現、即ち、'迷惑・被害'の意を表わす被害受動文は、韓國語には現われなかった。

(4) 日本語の受動文の表現を韓國語の表現と對照した場合、日本語の直接受動文は、韓國語にも受動文に表現されているが、日本語の間接受動文は 韓國語において自然に能動文とに表現されるのが普通であることに氣づいた。

(5)、日本語の使役受動文のような文法形式は、韓國語には存在しなかった。

特に、日本語の使役受動文に對應する韓國語としては、能動文の表現を用いた方が自然に感じられた。

國文抄錄

日本語의 受動文에 관한 考察

— 韓國語의 受動文과의 對照를 中心으로 —

金 勝 漢

韓·日兩國語의 受動文을, 形態·統語·意味的인 面에서 對照考察하여 본 것을 要約하면 다음과 같다.

(1) 文法的 形式面에서, 日本語는 動詞에 助動詞, '(られる'를 붙여서 나타내는 데 비하여, 韓國語는,

① '이·히·리·기'등의受動補助語幹의 添加,② '하다' 動詞의 '하'대신에 '—되' 등을 바꾸어 넣는 形態, ③ 受動助動詞 '(—아/—어)지다'에 의한 形態
의 세 가지가 있었다.

(2) 日本語의 受動文은 ① 統語, ② 統語와 意味, ③ 意味, ④ 統語·意味의 절충등의 觀點에 따라, 각각 下位分類되고 있다.

③ 日本語의 直接受動文에 해당되는 形式은, 韓國語에도 같은 形式이 있었다.

그러나, 日本語의 間接受動文 가운데에서도 '(Bは)Aに~自Vれる','(Bは)Aに~Cを他Vれる'. 등의 形式에 해당되면서 '迷惑(めいわく). · 被害'의 뜻을 가지고 있는 受動文은 韓國語에서는 찾을 수 없었다.

(4) 日本語의 受動文 表現을 韓國語의 表現과 對照했을 때, 日本語의 直接受動文은 韓國語에도 受動文으로 나타났다.

그러나, 日本語의 間接受動文은 韓國語에 있어서 能動文으로 表現하는 것이 自然스러웠다.

(5) 日本語와 使役受動文과 같은 形式은 韓國語에는 存在하지 않았다.

특히, 日本語의 使役受動文에 對應되는 韓國語로서는, 能動文으로 表現하는 것이 자연스럽게 느껴졌다.

Summary

A Study of the Passive Construction in Japanese;

– A Comparative Analysis with Korean –

Kim Sŭng-han

A syntactic and semantic analysis of the passive construction in Japanese has been made in contrast with Korean in order to observe the following:

1. In Japanese, the auxiliary *(ra) reru* is inserted after the main verb to form passive sentences whereas, in Korean, passive sentences are derived (1) by inserting passive particles of –i, –hi, –li, or – *ki* after the main verb, (2) by replacing *ha* of the verb *hata* appearing in active sentences with – *toe*, or (3) by employing the verb *(–a/–ŏ) chita* as the independent passive marker.

2. In Japanese, the underlying aspects of the passive forms are to be subdivided into the following, depending upon their functions: (1) syntax, (2) syntax and semantics, (3) semantics, and (4) eclecticism of syntax and semantics.

3. The construction of Japanese direct passive forms can be represented in the same manner as those of Korean, and such adversative passive forms as (B*wa*)~A*ni*~intransitive verb+*reru* and (B*wa*)~A*ni*~C*wo*~transitive verb+*reru* appearing in Japanese indirect passive forms exist exclusively in Japanese, while indirect passive forms derived from the transitive verb occur in both languages.

4. In terms of semantics, Japanese direct passive forms have the same properties of meaning as those of Korean, whereas it is more natural that the semantic properties of Japanese indirect passive forms are to be expressed in active forms for Korean.

5. The semantic properties of Japanese causative passive forms cannot be represented in Korean; instead, it is more natural for them to be represented in active forms for Korean.